

「立ってベテルに上ろう」

創世記 35 章 1-7 節

ヤコブの人生は、生まれる時から争いでした。彼は、双子の兄エサウのかかとを掴んで生まれてきたために、ヤコブという名前が付けられました。ヤコブという名には「かかとを掴む者」「争う者」「押しのける者」という意味があります。その名前の通り、彼の 147 年の人生は、争いや悩み、家族との葛藤の中をさ迷い続けた波乱万丈の人生でした。

では、そのヤコブの人生を支えたものは、何だったのでしょうか。それは、神様からの約束でした。かつてヤコブがエサウの殺意から免れるために逃亡を余儀なくされた時、不安と孤独の中にいるヤコブに神さまは現れ、こう約束してくださいました。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。……見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」（創世記 28:13-15）。

この約束の言葉があったからこそ、ヤコブは信仰の道を歩み通すことが出来たのだと思います。今日の 3 節でヤコブはこう言っています。「さあ、これからベテルに上ろう。わたしはその地に、苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る」。ベテルは、ヤコブが初めて神様と出会い、「わたしは決して見捨てない」という約束をいただいて礼拝をしたところです。ヤコブにとっての信仰の原点とも言うべき場所です。

“あの最初の礼拝の時から今に至るまで、様々な苦労や困難があった。” しかし今、ヤコブは、それらすべてを乗り越えて言うのです。「さあ、これからベテルに上ろう。私はその地に、苦難の時、私に答え、旅の間、私と共にいてくださった神様のために、祭壇を造る」と。

じつはこのあと、再びヤコブは大きな試練に遭います。創世記 35 章だけでヤコブは立て続けに三人の大切な人の死を経験することになるのです。一人目は最愛の妻ラケルの死でした。二人目はヤコブの母リベカの乳母デボラの死。そして三人目は父親のイサクの死です。特にラケルの死は、出産という新しい命が生まれ出る中で起こった出来事でした。ヤコブにとって、それはどんなに悲しく、つらい出来事であったのでしょうか。子どもの出産という本来最も幸せな瞬間が、最も悲しい瞬間に変わってしまったのです。

このとき、ラケルは、陣痛のひどい苦しみの末に生まれた子に「ベン・オニ」という名前を残しました。それは「苦しみの子」という意味です。しかしヤコブは、この子は苦しみの子「ベン・オニ」ではなくて、幸せの子「ベニヤミン」だと言ったのです。その後ヤコブは、その子を見るにつけ、その子の命と引き換えに死んでいった最愛の妻ラケルのことを思い出したことでしょう。ラケルとの日々は苦しみではなく幸せであった。だから、その子をベニヤミン「幸いの子」と名付けたのです。この子は苦しみの象徴ではなく、幸せの象徴なのだというのです。

また、ベニヤミンという名前は、「ベン」と「ヤミーン」という単語が合わさったものです。「ベン」は「息子」という意味で、「ヤミーン」は「右手」を意味します。聖書において「右手」は、神さまの御力や支えを表しています。ですから、この子の存在は、神さまが私たちと共におられ、義の右の手で私たちを支えていてくださる確かな証しなんだというのです。

私たちも同じ想いではないでしょうか。振り返ってみれば、神様は、私の歩んだ道にいつも共におられ、支え続けてくださっていた。私たちは故人を偲ぶとき、同時に共にいてくださった神さまを思い起こすのではないのでしょうか。

神様を礼拝することで、ヤコブは「ベン・オニ」、「苦しみの子」を「ベニヤミン」、「幸いの子」と呼ぶことができる者とされました。つらく苦しい思い出を幸いの思い出に変えることができたのです。もちろん、そんな力はヤコブの内にはありません。それは、「苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神様」から与えられたのです。その神様を礼拝する時、苦しみの思い出が、幸いの思い出に変えられたのです。

私たちも十字架と復活の主を見上げる時、私たちは示されます。私たちの愛する人は、死に飲み込まれたのではない。主イエス・キリストによって罪赦され、永遠の命に与り、天国から私たちのために祈ってくれている。そのことに気づかされるのです。ですから、私たちも、今ここで礼拝をささげているのです。「苦難の時わたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神様」に礼拝をささげているのです。

2節でヤコブはこう勧めています。「身を清めて衣服を着替えなさい」と。それは、心を新しくする、つまり悔い改めるということです。

新しい衣を着る。私たちにとっては、イエス・キリストを着るということです。私たちは、気づく気づかないに関わらず、神の愛など全く理解せずに、それどころかその愛を踏みにじってしまうような者たちです。けれども、そんな私たちのために、イエス・キリストは、赦しの贖いとなってくださった。ご自身の前にある喜びを捨て、恥をもちとわず十字架の死を耐え忍び、私たちのために祈り、神さまの恵みへと引き戻そうとしてくださった。そのイエス・キリストの命の衣を着る。私たちも今日、キリストを着た者としての歩みを新たに踏み出す者にしていきたいと願います。